

入選

— 中学生以下の部 —

「『好き』と向き合う」

向山芽依さん

推し本:『ちはやふる』

著:末次由紀

推したい相手: QuizKnockの皆さん



「『好き』と向き合う」 向山芽依

「なんでかるた？やんないよそなのー。」かつての自分だったら、きっと同じことを思っただろう。『ちはやふる』に出会うまでは。たった三十一音の言葉で表現される百人一首。瑞沢高校に通う女子高生、綾瀬千早が競技かるたで日本一の女性であるクイーンになるために努力を重ねていく。このマンガに出会うまで、競技かるたや百人一首は未知の世界だった。競技かるたに関しては、存在自体知らなかった。「現代人なんだから昔の言葉なんて分かるはずがない」「よく分からないし、つまらない」そう決めつけていた。千早は中学のときに、かるたを一緒に楽しんでもくれるかるた仲間を作ろうとしたことがある。しかし、友達から返ってきたのは初めに書いたような冷たい言葉とばかにしたような笑い声だった。ああ、この時千早はどんな気持ちだっただろう。自分が大好きなかるたを興味を持ってくれるどころか否定されたのだ。辛かっただろう。苦しかっただろう。好きなものを理解してもらえない複雑な気持ちは、とても共感できる。なぜなら、私も似たような状況にいるからだ。実は『推し文大賞』に応募した理由が好きなものと関係している。私は、この作文コンクールのポスターを学校で見た時すぐに引きつけられた。大好きな QuizKnock がいたからだ。私も千早と同じように、学校で QuizKnock の話ができる友達はほとんどいない。千早と自分を重ね合わせることで、悲しさが胸に突き刺さるように気持ちが伝わってきた。全く興味が無かった競技かるたや百人一首の世界の魅力に引き込まれたのには、理由がある。それは、かるた部顧問である宮内先生の考えに衝撃を受けたからだ。千早や他の部員達の試合を見守っていた時、ふと思う。『男女の別なく、体格の別なく、年齢の差なく、知性と体力の別なく、読まれた瞬間に千年まえとつながる。そんな競技いくつもない』と。確かにそうだと私ははっとした。競技かるたは、名人、クイーン戦以外の大会で男女分かれたり、柔道のように体重別で分かれたりしない。年齢ごとにも分かれなない。私は、競技かるた以外でこのようなルールの競技を知らない。また、百人一首は何百年も前に鎌倉時代の歌人である藤原定家がまとめたものである。きっと今を生きる人々の心にも響く何か

があるからこそ現在まで百人一首が残っているのだと私は思う。競技かるたの魅力を様々な視点から見て気づくことができる宮内先生を尊敬せずにはいられなくなった。同時に、私が競技かるたや百人一首の世界に引き込まれた瞬間でもある。将来、宮内先生のような様々な視点からものを捉え、良い所を見つけ出せる人間になりたい。千早が小学六年生の時に会う転校生、綿谷新とかるたをする場面が印象に残っている。新は永世名人の孫で、全国大会では毎年優勝していた。しかし、初心者の千早相手に手を抜かずに本気でかるたを取った。私は、かるたと本気で向き合う新の気持ちの強さに胸を打たれた。千早はせめて一枚だけでも取りたくて仕方がない。「あの札知ってる。あれ一枚だけでも。」千早が狙ったのは『瀬を早み』の札だった。『瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ』この歌には『川の流れる速く、岩にせき止められた急流が二つに分かれる。しかし、また一つになるように愛しいあの人と今は別れても、いつかはきっと再会しようと思っている。』という意味がある。新は、後に地元の福井に帰ってしまう。きっと離れ離れになってしまう新と千早の心情を表しているのだろう。この歌の意味を調べた時、すぐにそう思った。「三十一音の中にこんなにたくさんの繊細な思いが詰め込まれているのか。」心の中に感動が押し寄せた。百人一首の世界に引き込まれたのは、歌の意味の奥深さを知ったからでもある。千早がクイーンである同い年の高校生、若宮詩暢と初めてかるたをした時のこと。たった五枚しかクイーンから札を取れなかった千早。圧倒的な強さを突きつけられるが、試合の後泣きながら素振りをしている千早の姿に驚愕した。自分なら、現実から目を背けて夢を諦めてしまうかもしれない。しかし、千早は諦めの気持ちを見せず、それどころかさらにクイーンになりたいという思いが強くなっていった。『好き』と向き合うことは楽しい時も辛い時もある。千早を見ると、かるたが好きという気持ちが溢れすぎて周囲を竜巻のように巻き込んでしまうこともあった。しかし、そんな性格の千早だからこそ夢を叶えられたのだと思う。私にかるたの魅力や、打ち込むこと、向き合うことの大切さを教えてくれた千早に感謝している。ありがとう、千早。